

旅の創造

ジェラルール・ド・ネルヴァルの『東方紀行』

丸山義博

一年近くに及んだ東方への旅が終わりに近づいたころ、ジェラルール・ド・ネルヴァルは友人のジュール・ジャンンにあてて手紙を書いている。その一部を引用してみる¹⁾。

……結局のところ東方は僕が二年前に夢に描いていたものには近付いてくれません。あるいはまた、あの東方は更により遠くか、より高い所にあるのかも知れません。僕はもう詩情を追い求めるのはたくさんです。それは僕たちの戸口か寝床の中に潜んでいるのでしょうか。僕はいまだに走りまわる人間ですが、足を止めて待つように努力してみることにします……（1843年11月16日、マルタ島付近の海上²⁾）

長い旅を振り返ったネルヴァルの感想は失望に近いものだったようだ。彼が追い求めた「詩情」とはなんだろうか。この手紙の半年前、カイロを発ってコンスタンチノーブル（現在のイスタンブール）に向かう直前にテオフィル・ゴーチエに宛てた手紙がある。ゴーチエが台本を書いたバレエ『ラ・ペリ』³⁾にふれて、オリエントの地を踏まずにオリエントの妖精のバレエを書いた友人に、ネルヴァルはこんなことを言っている。

……君には土地の描写はしないようにしておきたい。君もいずれ来るのだろうし、そうしたら恐らく僕よりずっとたくさん語る事になるのだろうから、前もってあまり真相を知りすぎないことが肝心だ。『千

『千夜一夜物語』の町は少々墮落しているし、埃っぽいが、まだここからは創作できるものはある。悲しいのは民衆の貧しさだ。君がカイロを見る前にバレエの舞台にしたのは賢明だった…… (1843年5月2日、カイロ⁴⁾)

ネルヴァルが追い求めていた詩情は『千夜一夜物語』の世界から連想されるものだったのだろう。幻滅はすでにカイロで始まっていたのだった。その後シリア、レバノンと苦しい旅を二ヶ月余り続けてようやく最終目的地であるコンスタンチノーブルにたどり着く。久しぶりにフランスの新聞を手にしたネルヴァルは「プレス」紙7月25日号の劇評でゴーチエが自分の作品について言及していることを知る。ゴーチエはコニヤール兄弟作の劇『レノーレ』を批評しているのだが、これはアンリ・ブラーズ・ド・ビュリーがビュルガーのバラード「レノーレ」をもとに書いた短編を劇化したものである。ところがゴーチエは「レノーレ」のフランス語訳は友人ジェラルルのものが最高で、モンプーの曲は詩の雰囲気を見事に伝えているなどと本題そっちのけで長々と書いている。ネルヴァルにとってこの記事がいかに嬉しかったかは想像にかたくない⁵⁾。お返しに地元で発行されている「コンスタンチノーブル新聞」9月6日号にゴーチエ宛公開書簡を掲載した。旅をするネルヴァルにつきまとうもうひとつの思いがその中に書かれている。

友よ、僕たち二人は例の寓話、幸運を追い求めて出かけた男と、果報を寝て待っていた男についての寓話を体現しているのだ。僕が追い求めたのは幸運ではなく、それは理想や色彩や詩であって、おそらくは愛もそうかもしれない。ところがそれらは留まった君にはそっくり訪れたのに、追い求めて出かけた僕からは逃げ去ってしまった。(……) 僕は王国から王国へ、地方から地方へと旅をして、世界の

半をすでに失ってしまっている。やがて僕の夢の拠り所をどこに置けばいいのか分からなくなってしまうに違いない。だが、空想の世界から追放してしまったことを最も悔やんでいるのはエジプトだ。それはわびしく僕の思い出の中にしまわれてしまうだろう……⁶⁾

わびしく思い出の中にしまわれたオリエントと、旅行記として新聞や雑誌に連載され、やがて一本にまとめられ『東方紀行』(1851年)⁷⁾ となって完結する作品との関係はどのようなものなのだろうか。その完結した『東方紀行』の「序章 東方へ」には次のような一節が見つかる。

(……) 町から町へ、国から国へと遠く旅するにつれて、幼い頃、本や絵や夢によって自分で作り上げた、あの美しい世界が失われてゆくのは、何ともつらいものだ。そうやって子供の頭の中に築かれた世界は、あまりに豊かで、美しいものなので、それが一体学んだ事柄をふくらませた結果なのか、あるいは前世の記憶を思い出しているのか、はたまた未知の惑星の魔術的な地理であるのかわからないくらいだ。どんなに魅力ある光景や地方に巡り合おうとも、想像力が本当に驚かされることはないし、想像の及ばぬ新奇なものなど何もありません⁸⁾。

これは東方旅行の経験が書かせているように思われるが、事実是这样ではない。というのも最初に発表されたのは「プレス」紙1840年3月26日号で、タイトルは「旅の便り Ⅲ」となっていた。ネルヴァルは1839年の10月末にパリを出てスイス、ドイツを経由してウーンに行き翌年の3月パリに戻るのだが、この旅の様子が帰国後「プレス」紙に連載されたのであって、書かれたのは東方に旅立つ一年以上も前のことなのである。旅はネルヴァルにとって重要なものだったが、必ずしも期待通りのもの

は与えなかったということは注目しておくべきだろう。さらに『東方紀行』はウイーン旅行と東方旅行が組み合わされて成立していることにも注意しなければならない。ネルヴァルにとってウイーンこそがオリエントへの入り口で、ウイーンから東方に向かうのが東方旅行だという思いがあった。できればドナウ河を下るルートを取りたかったようであるが実現しなかった。『東方紀行』に「序章 東方へ」とタイトルを付してウイーン旅行が組み込まれ、主人公がウイーンから汽車でトリエステに向かい、船でアドリア海を航海するように書かれているのはまったく架空の旅程なのである。ではこの架空の旅程はどのように成立したのだろうか。それについて筆者の考えを以下にまとめてみたい。

いくら幻想が失われようとネルヴァルは旅に出ることをやめることはなかった。友人の証言や作品を通してみるとネルヴァルは束縛を嫌い、パリの街で自由な生活を満喫することのできた近代的な都会人だった。機会があればいつでも旅ができる自由も当然そのような生活には含まれるわけであるが、ネルヴァル自身は旅に惹かれる性向に深い心理的要因を考えていたようだ。最晩年の自伝的作品の一つ「散策と回想」に次のような一節がある。

私は母の顔を一度も見ることがない。彼女の肖像は失われたか、盗まれてしまった。ただ、「ラ・モデステイ (慎み深さ)」とよばれる、プリュドンかフラゴナールの絵を模した版画の女性に似ていることだけは知っている。彼女の死の原因になった熱病は、私の人生の節目節目に三度、規則的な間隔で、周期的に私を襲った。その時期にはいつも私は、私の揺籃を取り巻いた喪と悲嘆のイメージに、精神がうちのめされるのを感じたのだった。母がバルト海の岸辺から、あるいはシュプレー河やドナウ河の川岸から書き送った手紙を、いくど読んでもらったことか！ 不可思議なものへの感覚や、遠い旅路への志向は、

私にとって、おそらくこうした幼年期の印象から生まれたものだったろう⁹⁾。

だが作家として旅を作品にするとなると、現実の旅が想像力を束縛してしまうことに悩まなければならなかったのである。ネルヴァルは1841年2月に激しい精神錯乱状態（本人に言わせれば熱病）に陥り、長期の入院生活を余儀なくされた。これが人生の節目であったことは間違いない。いや人生最大の危機だったのである。作家生命が絶たれたと見なしている世間に対して自分の健在ぶりを知らしめなければならない。このような思いと長い入院生活で自由を奪われていた状態からの解放が、東方への旅を企てさせたのではないか。この企てを成功させるためには旅から無事に帰国するだけではなく、その成果を作品で示す必要があった。こうしてみるとネルヴァルには帰国後のんびりしている余裕はなかったはずだ¹⁰⁾。この危機をうまく乗り切ることでネルヴァルは作家として大きく飛躍するのである。

43年末に旅から戻ると翌44年早々から旺盛な執筆活動が開始される。週刊の「アルチスト」誌で1月から劇評を担当し定期的に批評を執筆する一方で、創作も発表しており、46年4月までのあいだに同誌に合計63本の記事を書いている¹¹⁾。46年5月からは「両世界評論」誌によいよ『東方紀行』の本体である「カイロの女たち エジプトの生活情景」の連載が始まる。「両世界評論」連載開始までの『東方紀行』関連記事を以下に年代順に並べてみる¹²⁾。

1844年

- (1) 「ギリシアの一日 一、キクラデス諸島、聖ゲオルギオス」, 「アルチスト」2月11日号。『東方紀行』「序章」19, 20章プレオリジナル。

- (2) 「シテールへの旅」, 「アルチスト」6月30日号。『東方紀行』「序章」12, 13章プレオリジナル。
- (3) 「シテールへの旅 3, 4」, 「アルチスト」8月11日号。『東方紀行』「序章」14, 15章プレオリジナル。

1845年

- (4) 「エーゲ海の思い出 セリゴ島」, 「アルチスト」6月1日号。『東方紀行』「序章」16, 17, 18章プレオリジナル。

これを見ると『東方紀行』の章の順番と発表時期とが前後している。旅行記全体の構想がまだ定まっていなかったことはあきらかだ。とは言っても(1)を読めばこれがネルヴァルの旅行記のスタイルで書かれていることがわかる。書き出しはこんなふうになっている。

「友よ、三日前から航行しているエーゲ海のまっただ中で君に便りをせずに怠けているつもりはなかった ……」

ネルヴァルは1838年のドイツ旅行以来、旅行記を連載することを続けてきたが、それらは基本的に旅先からの便りという体裁を取ってきている。ここでもそのスタイルが用いられているわけだが、これまでの旅行記事が相手に *vous* でよびかけ、読者一般を念頭に置いて書かれているのに対し、ここでは「友よ」という書き出しで始め、相手を *tu* (君) で呼んでいる点が、細かなことのように目される¹³⁾。旅行記を書き続けるにあたって、どのようなスタイルを取るべきか、ネルヴァルはこのころから考えていたのかもしれない。友人にせよ読者にせよ、誰か相手に便りを書くスタイルは書きやすかったろうが、逆に書簡体のもつ欠点¹⁴⁾もあって長い連載をしようとする書きにくかったのではないか。いずれにせよ「カイロの女

たち」以後はこのスタイルは踏襲されなくなるのである。

2月11日号の記事のタイトルは「キクラデス諸島」となっているが、実際にはそのひとつシロス島（ネルヴァルはもうひとつの呼び方を用いてシラ島としている）の探訪記である。ただしネルヴァルは1843年1月9日にシロス島に到着するとその日のうちにアレクサンドリアに向けて出航したことが分かっているから、島内をゆっくり巡る余裕はなかったはずである¹⁵⁾。効率よく歩くため、文中に書かれているように案内書として先人の旅行記を携えていたかもしれない。いずれにせよ実際の旅の不足を文献で補って旅行記を書くという新しい方法が取られたのである¹⁶⁾。

この方法がシテール島（イタリア語でセリゴ、ギリシア語でキュテラ）への旅を扱う上記（2）から（4）までの一連の記事を書くことを可能にしたのだった。ネルヴァルは一度もこの島に足を踏み入れていないので、文献によって島の描写をするほかなかったのである¹⁷⁾。シテール島はアフロディテが誕生した海が近くにあり、そのため古代から愛の女神の神殿が建てられ、恋人たちの巡礼地とみなされてきた。15世紀にイタリアのフランチェスコ・コロナが書いたとされる奇書『ポリフィルの夢』をネルヴァルが長々と紹介しているのはそのためである。ポリフィルとポリアのプラトニックな恋愛とシテール島への巡礼を扱ったこの作品は、いかにもネルヴァルの好みに合っていると見えよう。また章のタイトル「シテール島への旅」はヴァトーの傑作「シテール島の巡礼」（ルーヴル美術館）を想起させずにはいない。ところが、上陸できなかったネルヴァルは記事を書くため文献を渉獵するうちにシテールに抱いていた幻想が崩れてしまう。

ネルヴァル作中の旅人は夜明け前から甲板に出て待機している。船がギリシアに近づくとつれ夜が明けてくる。暁の素晴らしい光の中、海上に姿を見せた愛の島を目にして感動に震えた旅人はしかし、島に近づくと次のような感想をもらすのである。

これを夢見てきたのだ…… でも目覚めてみたらなんということだろう！ 空も海も昔と変わらない。オリエントの空とイオニアの海は毎朝聖なる愛のくちづけを交わしている。だが大地は死んだ、人間の手にかかって死んだのだ。そして神々は飛び去ってしまった！¹⁸⁾

そしてまたこんな光景も（まるで見てきたように）書いている。これはネルヴァルの独創であろう。

船がサン・ニコロに寄港しようと、沿岸沿いに進んでいく際に、小さな記念碑らしきものが、紺碧の空を背にぼんやりと浮かんでいるのに気づいた。いずれかの守護神の像が、岩山の上にもまだ立ち残っているのかと思われた……。ところが、さらに近づいてみて、その岸辺に旅行者の視線を引きつけているものの正体をはっきりと見分けられた。それは絞首台だったのだ。三本の腕木のうち、一本には何かがぶらさがっている。本物の絞首台というものを、生まれて初めて、イギリスの領土となったシテールの地で見ることになるうとは！¹⁹⁾

「シテールへの旅」は架空の旅である、そして幻滅の旅でもある。そのことを疑問の余地のないものにするために唐突に絞首台を登場させたのだ。この絞首台は「シテールへの旅」というテーマにたいするアイロニー以外の何物でもない。この記事を読んだボードレールが『悪の華』の詩「シテールへの旅」を作ったことはよく知られている²⁰⁾。架空の旅だとは知らなかったかもしれないが。

冒頭に引いたジャンンへの手紙で、夢に見た東方は近づいてくれなかったと言い、旅に出ると幻想の世界が失われていくと嘆いたネルヴァルは、どのように東方への旅を作品にするのかという課題に向き合わなければならなかった。帰国後まもなく書かれた「アルチスト」誌掲載の一連の記事

がその課題に対する答えだったのではないかと筆者は考えている。つまり、それまでの旅行記に対する批評となるような旅行記を書くということである。44年に書かれた「アルチスト」誌の4本の記事の重要性は極めて高いと言わざるを得ない。

最後にウイーン旅行が『東方紀行』に組み込まれる経過を書いて本稿を終えたい。「シテールの旅」の発表を終えたネルヴァルは、ほぼ一年後の1846年5月から「両世界評論」誌に「カイロの女たち エジプトの生活情景」(『東方紀行』「カイロの女たち」プレオリジナル)の連載を始める(5月、7月、9月、12月の4回)。明けて1847年、同じく「両世界評論」2月号から「東方生活情景」(『東方紀行』「カイロの女たち」, 「ドルーズ派とマロン派」プレオリジナル)の連載が開始される(2月、5月、8月、10月号の4回)。さらに「アルチスト」誌11月21日号に「エーゲ海の思い出、シラの風車」(『東方紀行』「序章」最終章のプレオリジナル)が発表される。

1848年2月に44年から連載を続けてきた記事をまとめて『東方生活情景』が二巻本としてサルトリウス書店から刊行される。運悪く二月革命の混乱で出版界が不況に陥り版元の資金繰りが悪化、一巻目は予定通り刊行されたが二巻目はスーヴラン書店に買い取られ1850年8月に同書店から刊行された²¹⁾。このエディションの「序章」には『東方紀行』「序章」のXII章からXXI章が収録されているだけで、まだウイーン旅行は含まれていない。つまり「序章」は44年から47年まで「アルチスト」誌に発表された記事だけで構成されているのである。なお「シテールへの旅」という章のタイトルはこのとき消えてしまう。

1849年1月から週刊誌「シルエット」に「アルカーヒラ 東方の思い出」の連載が始まり、翌年の1月いっぱいまで続く。アルカーヒラはアラビア語で「カイロ」のことである。ここに初めてウイーン旅行が組み込まれた。つまり『東方紀行』「序章」のI章からX章までに相当する部分が「プレス」紙などの記事から再録され、さらに「シテールへの旅」の部

分と接合するため XI 章「アドリア海」がこのとき新たに執筆されて付け加えられたのである。

「シルエット」紙の連載が50年1月に終わると3月から共和派の新聞「ナショナル」に「ラマダンの夜」の連載が開始された。連載は5月で終了し『東方紀行』のコンスタンチノーブルの部分が完成する。シャルパンチエ書店から二巻本の『東方紀行』が刊行されるのは1851年6月である。こうしてパリを出発し、ウイーン、カイロ、コンスタンチノーブルというネルヴァルの世界の、三つの極をめぐる大きな旅の円環が閉じたのである。

注

- 1) 『ネルヴァル全集』（全6巻、1997-2003、筑摩書房。以下『全集』と略す）に翻訳があるものは原則としてそれに拠ったが一部変更したところがある。
- 2) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes, Pléiade*, tome I, p. 1407. プレイヤード版全集Ⅰ巻(1989年)、Ⅱ巻(1984年)、Ⅲ巻(1993年)をそれぞれ *O.C. I*, *O. C. II*, *O. C. III* と略記する。
- 3) 初演はこの年の7月17日。ル・ベルチエ通りのオペラ座(当時の呼称では王立音楽アカデミー劇場)。
- 4) *O.C. I*, p. 1395.
- 5) 記事の内容からすると、ゴーチエが参照しているのはネルヴァルの訳詩にイポリット・モンプーが曲をつけ、セレストアン・ナントゥーユとカミーユ・ロジエが挿絵を描きヴィクトル・ユゴーに献呈された本。出版は1833年。モンプーは1841年に37歳で亡くなっているが、ネルヴァルがデュマと共作しジェニー・コロンの主演したオペラ・コミック『ピキエヨ』(1837)の作曲者でもある。画家たちは青春時代からのネルヴァルの友人。カミーユ・ロジエとはコンスタンチノーブルで再会し一緒に帰国することになる。ゴーチエの記事はネルヴァルにとっては青春のよみがえりでもあったかもしれない。そうだとすれば二重の感動があっただろう。
- 6) *O.C. I*, pp. 764-765.
- 7) *Voyage en Orient par M. Gérard de Nerval. Troisième édition, revue, corrigée et augmentée*. Paris, Charpentier, 2 vol. 以下『東方紀行』と略す。
- 8) *O.C. II*, p. 189. 以下プレオリジナルを参照している場合でも特に異同がない場合はプレイヤードの該当箇所を示す。
- 9) *O.C. III*, p.680.
- 10) 東方旅行から戻ったネルヴァルは自宅を秘密にしていたのではないかと思われる。帰国後ネルヴァルは友人の画家カミーユ・ロジエのアトリエを連絡場所としており、46年7月2日英国旅行のため申請したパスポートの住所もロジエのアトリエが依然として使われている(Pichois, Claude et Michel Brix, *Gérard de Nerval*, Fayard, 1995, p. 260.)。しかし45年8月、すなわちパスポ

ート申請の一年近く前に、アルジェリア旅行中のゴーチエに宛てた手紙では「僕は市門の近くにある庭に囲まれた家を借りた。そこは誰も知らないで、呼び鈴の音に邪魔されずに目を覚ますことができる」と報告している。この新しい住まいがどこなのか不明だが、町中を離れて静かに仕事をする環境を必要としていたのだと思われる。

- 11) Pichois, Claude et Michel Brix, *op. cit.*, p. 230.
- 12) 『全集』第6巻「年譜」から抜粋。pp. 442-443.
- 13) 『東方紀行』「序章」全体は「友へ *A un ami*」という献辞が付され相手を「君 *tu*」で呼ぶように統一された。
- 14) たとえば作者と作中の旅行者が混同されやすいということがあげられるだろう。
- 15) Pichois, Claude et Michel Brix, *op. cit.*, p. 215.
- 16) シロス島探訪でネルヴァルが参考にした書籍については次の研究がある。
Riegert, Guy: «Sources et Ressources d'une île : Syra et le Voyage en Orient de Nerval», RHLF, novembre-décembre 1981, pp. 919-943.
- 17) ネルヴァルがシテール島の描写のため参照した本については次の研究が知られている。Gilbert Rouger: *Gérard de Nerval à Cythère*, RHLF, 1948, pp. 296-308. この論文は同じ著者による次の校訂版（最良のものとする）の解説にほぼそのままの形で再録されている。*Voyage en Orient, texte établi et annoté par Gilbert Rouger*, Éditions Richelieu, 1950, 4 vol.
- 18) *O.C. II*, p. 234.
- 19) *O.C. II*, p. 240.
- 20) ボードレールの詩が「両世界評論」に掲載されたのは1855年6月1日号（雑誌側の自己検閲で9連目が削除されている）。ネルヴァル死後の発表であるが草稿が生前にネルヴァルに贈られた可能性はあるという。草稿のひとつには「アルチスト」のネルヴァルの記事から創作したとのメモが付されている。詳細は次を参照。Charles Baudelaire, *Œuvres complètes*, Pléiade, tome I, 1975, p. 1069 *et sqq.*
- 21) 二巻目はサルトリウス書店版も存在することが判明している。しかし現存部数はきわめて少ないようだ。内容はスーヴラン書店版と同一。詳しい事情は次を参照。Michel Brix *Manuel bibliographique des œuvres de Gérard de Nerval*, (Études nervaliennes et romantiques XI), Presses universitaires de Namur, 1997, pp. 66-72, p. 86.